

亞爾然丁時報  
文藝附錄



九五卷  
九廿九号

SEPT.  
DE  
1930

鷓鴣よ答へよ

南米太郎

(二)

腰元連に手傳つて水を汲み終ると、私は恐るく  
脚側へ同候して御戯れの御相手と相勤める。  
兩名の腰元は氣を利がしたつもりならう世米  
はかり彼方の小屋の前のアルガロボの走木の蔭へ  
退却した。

由都チマコのアクセントの夢ハ、抜きのス  
ペイン語を彼女が告白する所に依れば、父上は「キ  
リスタン」國家のブレシデンテ格の大酋長だつた。  
東部から進出して来た「白い悪魔」の大戦後祖  
國と部下の大多數を失ひ忠義の旗本の四五人と  
一結に風の日のプササの紙屑のやうに、さのうは東  
今日には西風のまに「あちらこちらから飛んで  
る」が、飲んでも異教徒のガジェタは食ひたくない。  
國を國粹主義者でつまり、ホンの志士高山夜  
九郎氏とイタリヤのムンを掛け合はして、そこへ印  
度のガンヂーとぶち込んで出来損ねたやうな卑  
命的な遺族の子孫の危命らしい。  
ところが、彼女は「正反對のコスモポリタンで、  
アモールに國境なし」といふ極めてデモクラチックな  
イデオロギイの信奉者で、且つ常に最新流行の尖端  
を、テンポの早い足取りで歩かうといふモカたさうだ。  
白く冴え渡つた十三夜の月影は、壊れかつたランチ  
イトの残骸を、其自身の美しい夢と詩と歌つてゐる。

さんだ國の廢墟の如く塗り直はし、地上の二人の影を  
甘い浪漫の泉の畔に悲しい初巻を語らう。チマコの  
ロックスとジュリエットにまで焼きなほす。  
なこやうで、夜鷓鴣が啼き出す。  
私はそつと彼女の多液質らしく柔かい手首を握り、  
高鳴る胸に靜かに引寄せ、野に咲くベルベナの赤い  
花と思はせる小鳥のやうに震へる唇に私の唇を押し  
しあてる。その戯的「利那ウ」永遠の瞬間だ。  
彼女の肩の「ロ」は、怒れる老酋長のやうな叫声を  
あげて、私の鼻の下へ「ギマツ」と噛みついて来た。  
アンニマメンブリー、天にくわれて焚はつちのえい。  
だ。

結局、爪の美しい芝居の主人公達がいやである  
如く、此の宵の二人もまたいと高き如く、悪戯者と  
見張りに給ふ「エホバ」の祝福を受けると、價しな  
つたわけだ。  
よもすがら熱い血潮の承肌が、目に見えぬ觸手を伸  
ばして私の官能を錯覚的に掻きまじつてくれた。  
夜の白むを待ちかねて、森へ向ふ。  
紫色の焚火の煙が、天地開闢以來一度もアイチヤ  
を觸れさせたため、如く女林の腰の周りに、横  
抱きにははりついて、牛乳色の朝霧と抱き合つたま、  
まだしつとりと眠つてゐた。  
腰から下露にぐつしよりなつてチマコに傍へ此り  
つく。  
アラ、アイチヤ!!  
インディオの群に附物の脊犬一匹その辺に見当らん  
じやないか。  
で、チマコがチヤチヤ一本ぶつ付れて盛んに燃えてあ  
るが、鷓鴣の羽飾をつけた白髪の老酋長も、可憐な  
チニータも、若い腰元達も、勇敢な家の子達の影も



短篇小説

惜春譜

肇子

それはやがて開かれた前黄色のカートンは春の昔  
い陽光と微笑とを吸って、ふくよかにゆらぎ  
のシネラリアは赤い唇をふるはしめる。

縁側の藤椅子に腰かけて降る様も日光を浴び  
下ら浩子はソッとつぶやいた。  
「正巳は先達つて父にセカンを買って貰った  
空気銃を肩に、いそぐと姉の傍に近づいた」

「あ、すんだとも……これから先達と一緒には松原  
公園に行くんだ、姉さん一緒に行かない？」  
「でも正巳さんの御共はいつもさんく引きつら  
れて私すつかりつかれてしまいますもの……」

「浩子さん、一緒に行つておらうしやい。こんど  
いとお天気に家にいっこんでみちやい。おん  
同時の間に去ってきたのぢ後から母も若々しい  
声です、めた」

家庭教師の村山はもう生垣の後方で待つてゐた  
陽にやけた角帽を此方と向いて笑つてゐた。

三人はそれぞれ一時固まりして芝生の斜面に  
並んで座つた。雲雀が代るく空に囀つた  
三人は黙つて正面の林を眺めた。  
「あ、百舌鳥だ!!」  
突然真中には正巳が叫んで二人に合図するや

の様に首を廻して眼を眺めた。  
二人はまるで呆氣にとられて眼を見張つて耳を  
すませた。正巳はいきなり空気銃を取りあげ  
た。そして丁度兵士が突撃する時の様子を  
に銃をうまへて大げさに腰をツクめて足をし  
のばせ下ら斜面を下りた……  
二人はだまつてそのあとを見送つた。  
正巳はやがて林の木立の下に立ちどまつた。  
そしてジーンと袖を見上げてゐたが……  
突然フルリと二人の方を振り向ひて手で頭を叩  
いて「アツ!!」と太く様を格構をした。

「アツ!!」浩子は思はず噴出した。そして笑  
ひ下ら村山を見た。村山もその時浩子を見た。  
然し彼の瞳は浩子のそれとは大分異つたものぢ  
あつた……  
彼は今まで何を考へてゐたのであらう?

濡つた眼には涙がへ光つてゐるかの様だつた。  
浩子はハッとして眼を伏せた。村山も慌て、立上  
つた——それから二人は家に帰るまで顔を見  
合せる事もなかつた。

その夕食の時である。  
「娘さん、いよいよ海軍兵学校を卒業なつた  
て早速K艦に乗船する様になつた  
父の口切りの思ひかけなくこの話題が出た時浩  
子は針でさされる様に吃驚した。彼女は俯向  
いて羽織の紐をしちり下ら何気ない肩を装つ  
た。だがそのやうな心を取繕らうとするはす  
ほど顔が真赤に燃えてくるのを自分で意識し  
下らどうする事も出来なかつた。

「やはり私一人の考へがやがやがたつたわ……」  
浩子は誰れかに話してもする様に私語いた  
順ニウラの平壇の話と母からきかされた時彼  
程の勇気はなかつた。決して拒んで首肯し  
て云ふことと母に悟らしむる事は出来た……  
「浩ちゃん……村山さんの靴がすい分ぬぐく  
つたのね。明日でも一緒に買ひかへてあげませう  
さんとお母さんそうしませうね。でも村山  
さん随分お気の毒な方ね。私いつもそう思ひ  
ますわ」

浩子は今、何ッそんな事を云ひ出されたのが自分  
でもびっくりした。  
「又浩ちゃんのセメン樽かい？」  
「まあいやちお母さんそうぢやないのよ」  
「でもお母さんはしみじみ偉いと思ひますのよ、  
中学校からずっと独立でやり通すつてこそは  
仲々出来る事ぢやないよ。浩ちゃんなど世間  
の苦勞も知らずに幸福すぎますよ」

「今度はお母さんのセメン樽かい？」  
「だつてい、ぢやないの。村山さんは村山さん  
順ニウラは順ニウラだもの……」  
「まあお母様つたら私そんな事云つてやしませ  
んわ」

浩子は思はず赤くなつて、はつきり怒つた様不  
口調で云つた。母はたしなめる様で眼つきで浩  
子を見やり下ら台所の方に急いだ……

村山が突然帰郷したいと暇を申し出た時浩子  
の父はひどく彼を気に入つてゐた丈け色々と留

めたが彼は帰ると云つてきかふかつた。帰へる  
と云つても村山の實家はとうになくなつた。唯中学  
時代の親友をたよつてゆく云ふだけだつた。  
それから後小一年で卒業する大学の方を放つた  
らうかしてどんな意味から云つても不得だし、彼が  
巡環多しの神経衰弱におかされてゐると云ふ事  
だつた。このまゝと云つて居ても、田舎よりもし、ドク  
ターに診てもらふ様にした方がよくなるかうか？  
それにしても、夏休みだからその時はどうせ一  
家揃つてK海岸の別荘に行くから……  
とまで云つていきこのたが、彼はとうしても帰ると  
言ひ通した。

「どうしたのでせうね？」母が顔を曇らして云  
つた。  
「多分哲學的懷疑だらう。文科の人達にはあ  
いふ病があるのはどうも仕方ない……」  
「でもお父さんの脚ヒイキヤ居なくなつてこまる  
ぢやない？」

「然し本々があまで帰郷したつてゐると云  
ふのも我々に打明けられぬ一身上の都合で  
もあるだらう。惜しいが仕方ない……」  
「い、村山が出發する日の夕食の時、常には  
無口の父が彼に葡萄酒を幾度もすすめて下さり色  
々と卒業後の目的等を向ふたりした。そして九月の  
新学期には必ず上京する様に  
かくと云ふのであつた。

夏近いそよ風がけらくと庭の青葉を鳴らし  
た。月は美しく庭は白ろかつた。そして座敷  
の電燈はわすらはしくさへ思はれた。そして座敷  
の父と正己とは黒い影を背負つて庭につゝ立つて  
ゐた。

村山が突然帰郷したいと暇を申し出た時浩子  
の父はひどく彼を気に入つてゐた丈け色々と留





# サボテンの影から

狂自生

(1)

「ホジエーラと場中を踊らなさい……」  
「ワイノの癖は、踊らなさい……」  
踊らなさい。十五六の少女から、白髪交りの四五十歳のお婆さんまで、目の廻りを赤く染めて興奮してゐた。  
舞臺の隅々では、リキハ訛りの方言で、早や甘い言葉が交されてゐる。  
今日は八月の世田、サンタローサの祭日だ。果しなま、聖熱帯の高原のファンマルチナの高山に、未だ白雪がチラリと残る頃の此の八月のサンタローサの祭日には、毎年賑がふ、バイレが、フエプロで行はれる。S.R.のエスタンシアから私共三人が、三里の山道を馬でたどりつた頃は、日も余程傾いて静かかた。着が、フエプロに押し通つてゐた。  
大きな煉瓦作りの家で、電気がない。フエプロでも百燭光の電球に相当する位いふ大きな石油ランプが光つてゐる。柔かい光りを、邸屋の隅々まで放つてゐた。  
今夜はエスタンシアの、パトロンの家で、フエプロがあるんだと、アマ……行こうよ、そして飲んで踊らうよ……  
と集つて来た廿四五人の女達と、十二三人程の若い男達や、私共三人は、カトリック教会の祭日などには何の關係もないもの、様を顔をして、無暗に鳴り

渡る鐘の音を他所に聞いてゐた。  
夜のは時半に、馭長の宅に招かれて、軽食を取つた。私共は準備の出来た踊り場——エスタンシアの、パトロンの家——に歩いて行つた。  
二百リトル入りの大樽が踊り場の隅の隅に置かれてあつて、来る人や遣しと待ち受けてゐた。ドストドセーナ程の強い酒や、女や子供を嬉はす甘い酒なども、後種類となく、轉がつてゐた。  
「セニョール、マ、ビエン、カレ、パレード……」  
と、エスタンシアから準備の爲めに廻されたカパタスのホセは、もう何杯も飲んだらうしい、恐れ入りながら、私共同行の一人、アルフレッド氏に告げに来た。  
「ウン、そり、が、じや、皆んなに、ウインと飲ませろ……」  
娘達には甘い酒を出す様にしろ……  
娘達には甘い酒を出す様にしろ……  
「未だ、延び切らない鼻を一寸なせませませ……」  
晴れた冬空には、半月が冷たく輝いてゐた。窓を閉めた部屋の中は、大勢の人達の呼吸の爲め、何んともなく、重苦しい気分がした。たが、やがてそれも、ギターとピアノの合奏や、蓄音機の高声の爲めに打ち消されて、舞つた。此処、持音のセンチメンタリズムが、タンゴの悲哀は、ともすれば耳もとに残らうとする。而して、れも亦た、何杯かのワイノの爲めに、また、向に打ち砕かれて、心は眼の前に、乱舞する。モロチヤ、崖への愛慾に移つて行く……  
男の数が女のそれよりも多ければ、その社会は、奴隷になつて行く。また、女の数が男のそれよりも多ければ、その社会は、墮落と淫蕩に流れて行くのは、何の無理もない。  
此のフエプロには、千人足らずの人達が、住んでゐる。その内、二百五十人内外の男性が居る。は、

(6)

りで、他は皆んな女達ばかりだ。刺戟的が更熱  
摩の高級に少しの男と多くの女。機会さへ  
本ればどの奥の享栄に身も魂も打ち込んで  
は舞ふのに何の無理があらうか。  
男達しやの情緒はタンゴにギターには、コンク  
と刻み込まれてゐる。

エスタンエロは至極上気味でニコくしまつた。  
た。多く飲めぬ私に最初の二三杯のワインで  
早やアルコレの恩典をつく。味づてゐるのに  
同行の英人は、ゴルドンテインを何林も飲んで平  
氣である。

九時過ぎた。十時も打った。  
もうい、加減に酔つ排ったカパタスのホセは予定  
のプログラムと見えて、馬麻に肥満した丸顔の  
ヴィヤと外へ出て行った。木の影は未だ寒か  
らうに。私共三人は目交はせして笑ひこ  
けた。

白い首巻きをしたエスタンシアのペオンのアント  
ニオを五十歳余りのお婆さんで頻りに口説い  
てゐた。

家にはドブレの水のカマがある。マテも  
ある。だにお若い。今晩はわつちと一緒に行くか  
い。ガハハ。と無遠慮な大声で一夜の悪を若  
者に求めて居るのを皆んが當り前の事だ。とま  
つた様子をしてみても、  
どう見ても十四か十五位にしが見へない小娘が  
これ。ペオンのラモンと、ソーンと、屋外に出て行  
つた。何の爲に出たか。此処に未だ  
居る程の人達は皆んが知つて居た。ヤチャて自分

等もーと言ふ愛慾に燃えた目をして踊つてゐ  
た。  
こんが艶つほい空気の中心で気持よく飲み續けて  
ゐたエスタンエロのアルフレッド氏は愉快そう  
な表情をしながら私に小声で囁いた。  
「キヨージさん、今晩は……」  
と、燕切れのよい日本語で少し話してから、今度  
はスペイン語で語をつた。

「……よい女を紹介するよ。ともシヤンだよ。  
惚れくするよ。だが私は只紹介の労だけし  
がとらないよ。……」より以上の事は、コーサルライ  
クライルだからね……」  
と笑ひながら時計を見た。

プラチナの懐中時計は十一時に十五分前を指し  
てゐた。  
もう来る時分だ。十一時迄にと案内してゐる  
のんだから……二人来るよ。一人は小学校の女  
の校長さんだ。他の一人は去年ゴルドン市の師範  
を出て此処の小学校に教鞭をとつてゐる未だ若  
い女教師だ。……美しいよ……」  
と云ひながら意味ありけに私の肩をたたくて、一つ  
威勢よく笑つた。

(つづく)

投稿家諸氏へ  
文藝附録への投稿は毎月廿日に締切ります  
題は任意(詩歌小説隨筆歓迎)  
編輯部